

氏名	やま だ きょう た 山 田 協 太
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学位記番号	工 博 第 2649 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	工 学 研 究 科 生 活 空 間 学 専 攻
学位論文題目	南アジアにおけるオランダ植民都市 (コロンボ, コーチン, ナガパトナム) の形成と変容に関する比較研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 高 橋 康 夫 教 授 高 田 光 雄 助 教 授 山 岸 常 人

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、17世紀から18世紀にかけて南アジアにおいてオランダが建設した植民都市コロンボ、コーチン、ナガパトナム、およびそこにおいて導入された都市型住居を対象とし、その形成と空間構成、ならびに、その変容を明らかにしている。草創期の近代世界システムの地理的拡張に主導的役割を果たした、オランダの植民都市に着目し、その形成から現代に至る変容の過程を包括的に論ずる点において、独自のものである。焦点となるのは、ヨーロッパ勢力、非ヨーロッパ系外来勢力、土着勢力3者の拮抗の上に成立する具体的都市空間である。本論文の研究成果をまとめると以下のようである。

序章では、既往の研究を整理し、本論文の視座と課題を示している。

第1章では、オランダの建設した全ての植民都市を対象とし、その基本的構成を明らかにしている。また、同時代の北欧および本国においてオランダ人エンジニアのおこなった都市計画の概要を明らかにするとともに、先行勢力であるポルトガルが東インドに建設した植民都市の基本的構成を明らかにし、オランダ植民都市と両者を比較することを通じてオランダ植民都市の特性を明らかにしている。さらに、16、17世紀のヨーロッパにおける都市計画の第一人者であり、その革新に主要な役割を果たしたS.ステヴィンに焦点をあて、彼の集大成となる「理想都市」計画案を都市計画史の流れの中に位置づけるとともに、「理想都市」計画案をオランダ植民都市のモデルとして措定している。加えて、アジアにおけるオランダの代理機関として機能した、オランダ東インド会社(VOC)による南アジアでの植民都市、要塞、商館建設の全体像を明らかにしている。

第2章では、インド東岸の植民都市ナガパトナムを考察の対象としている。ナガパトナムの歴史的形成を論じる中で、都市の基本的構成とその変遷を明らかにしている。また、市街全域を踏査し、現在の基本的構成を明らかにし、VOC統治期の基本的構成と踏査結果を比較しその変容過程を明らかにしている。都市型住居は、オランダ式タウンハウスと呼びうる前面にヴェランダを持つ独自の住居形式の存在を確認するとともに、平面構成の分析をつうじ、土着の住居形式からオランダ式タウンハウスの平面構成が成立する過程を解明している。

第3章では、インド西岸の植民都市コーチンを考察の対象としている。VOC統治期の都市空間構成とその変容を明らかにし、先行したポルトガル植民都市と比較し、VOCによる再編手法を明らかにしている。再編で適用された基本原理と「理想都市」計画案の空間構成の比較をつうじ、「理想都市」計画案が参照されたことを結論付けている。都市型住居は、実測調査から、オランダ式タウンハウスに加え、ポルトガルの影響を受けた住居の存在を明らかにしている。また、コーチンとナガパトナムでオランダ式タウンハウスの平面構成が異なることを論じている。

第4章では、スリランカの植民都市コロンボを考察の対象としている。コロンボの歴史的形成を論じる中で、都市の基本的構成とその変遷を明らかにしている。続いて、現在都市の主要な要素を構成するベタ、ヴォルフエンダールを対象に悉皆調査をし、空間構成を明らかにしている。両地区は居住地からそれぞれ商業地域、過密居住地に大きく変容した。両地区で

実測に基づく建築類型の調査をおこない、現在見られる建築類型はともに、オランダ式タウンハウスから発展したことを解明している。また、コロンボとコーチンのオランダ式タウンハウスは同一の平面構成を持つことを論じている。

結章では、以上の結果に基づき、VOCの植民都市および都市型住居の形成と空間構成、ならびに、その変容についてまとめるとともに、VOCによって建設された既存の市街地を再活性化するための指標を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、草創期の近代世界システムの地理的拡張を主導したオランダが、南アジアに導入した植民都市と都市型住居を対象とし、その形成、空間構成、変容を明らかにするものである。主な成果は次の通りである。

- (1) 植民都市の形成：S.ステヴィンの「理想都市」計画案がモデルとされた。グリッドパターン、中央運河による都市の主軸、主軸と直交軸を成す主要施設の配置などを特徴とする。
- (2) 植民都市の空間構成：城塞または要塞＋市街の構成を基本とする。構成は先行のポルトガル植民都市と同様であるが、敷地選定、街路・街区形態、施設分布で大きく異なる。「理想都市」計画案は基本的に市街において、主要構成原理が選択的に適用される。
- (3) 植民都市の変容：19世紀の蒸気船による航路再編を機にオランダ植民都市は異なる変容の過程をたどる。いずれの場合も、都市核として機能し、現代都市の原型となっている。
- (4) 都市型住居の形成：オランダ式タウンハウスと呼びうる形式が普及した。南インド土着の中庭型のタミル式住居と本国の住居の折衷である。インド東岸またはスリランカで成立し、インド西岸に伝播した。スリランカの都市型住居の基本型を成す。
- (5) オランダ式タウンハウスの空間構成：前面にヴェランダを持ち、室構成は本国の住居を踏襲する。成立経路は本国の住居からと土着住居からの2通りある。
- (6) オランダ式タウンハウスの変容：変容は4パターンある。増築、敷地の分割・統合が一般に見られ、中庭、裏庭の消失、敷地細分化の要因となった。改修、建替えは、19世紀後半以降の都市の急速な変化に伴ない生じた。改修、建替え後の平面形式は、既存住居と敷地形状に規定され、用途の別なく少数の類型に収束する。
- (7) 最後に、オランダ植民都市の市街再活性化の指針として、その特徴である高密居住を成立させる空間構成原理を抽出している。

本論文は、現代都市史、植民地建築史の観点から、学術上、實際上寄与するものであり、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。平成18年2月21日に、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。